

溝小だよ

<https://mizonobe-kahoku.edumap.jp/>

河北町立溝延小学校

学校通信 No.366

2024.2.29

発行：校長 小林 聡

学校教育目標：ふるさとだいすき かしく つよく やさしく
～つながりの中で わたしたちが創る 楽しい学校～

悠久の人と自然のつながりに思いを馳せる

お母さんがやぎを連れて医者に行った時のことである。私は一人で昼御飯を食べていた。牛はやぎがないので「モウモウ」とさびしそうに鳴いていた。そのうち「バリッ」と音がしたかと思うと、次の瞬間「バッカバッカ」とすごく速い牛の足音。まやに行ってみると、マセボ（マセン棒）がおだれ（折れ）、牛のごはんがこぼれ落ちていた。そこらの人は「うわあうわあ、牛だ牛だ。逃げろ逃げろ」と気の強い荒れ牛でもあるかのようにさわいでいた。（中略：なんとか、無事にもどってきたようです）

牛はちゃんとまやの中にいた。さっきまで涙を流していたのか、今もたくさん涙がたまっていた。おだれたマセボにかかわって新しいのがはめられてあった。「どだんどごで、どだんどして、牛ばへで来たな」と聞いた。お母さんは「〇〇さんのおんつあがしえめでけるかんじよしたげんとも、なかなかつかまらねえだ。おれ、やぎば見へだれば、わらわらやぎの所さ走ってきたんだ。ほして、やぎひっぽってきたら、牛もちやっちゃどやぎのあどさついで来んねえ。ほごらの人だ『ええ、牛どやぎ、なづいっだんだじえ』と言ったつけ」と話をしてくれた。

上の文章は、昭和34年3月に発刊された学校文集「なでしこ」第1号に掲載された6年生の作文「にげた牛」から一部抜粋したものです。この時代、今ではなつかしい方言もふんだんに使いながら、自然と共に暮らす人々の様子が生き生きと描かれています。

時代は移り、一人一台のタブレットを使った学習風景も珍しくなくなった今年度、子ども達は生活科や総合的な学習でアサガオ、ミニトマト、オクラ、だいこん、里芋、オーガニック野菜、6種の大豆等を育て、社会科では田植えや稲刈りを体験し、キャベツの葉に産みつけられた卵から幼虫、さなぎへとモンシロチョウを育て、アサガオの葉を食べていたエビガラスズメ（蛾）の幼虫を見つけては「この子はエビちゃんだね」とかわいがるなどして、自然と大いに関わってきました。

毎日ペットボトルに汲んだ水をやり、長靴を履いて畑に入っては、時には素手で、時には上手に道具を使って「手入れ」をしました。その「手入れ」を通して五感（視覚・聴覚・味覚・聴覚・触覚）が働き、研ぎ澄まされた子、生き物の変化と成長に驚き、その不思議さに惹きつけられた子がたくさんいます。苦手だった野菜が食べられるようになり、嬉しそうに話してくれた子もいます。猛暑の中、作物を育てることは一段と難しくなり、自分の思うようにはいかないのが自然だということも痛感しました。一人でできない時こそ、知恵を出し合い、力を合わせ、乗り越えようとふんばりました。思いやりややさしい心が育つのは、そうした体験を積みからだを改めて感じました。

人間が感じる「心の豊かさ」や「人の温かさ」は、「ものの豊かさ」や「くらしの便利さ」と必ずしも同じではないことを、私たちは自然から教わってきました。

豊かな自然に囲まれ、長い歴史をもった溝延小は、来年度「創立150周年」という大きな節目の年を迎えます。先日、第1回実行委員会（江目恭一実行委員長）が開かれ、「未来につなぐ」をコンセプトに活動がスタートしました。実行委員のみなさんは、恵まれた自然の中で長きにわたって溝延小を支え、共に子どもを育ててこられた多くの方々と一緒にお祝いし、未来へつなぐ第一歩にしたいという思いを強くもっておられます。

私たち大人が、子どもというかけがえのない未来のためにできることを真剣に、かつ楽しみながらみんなで探していきたいと思います。そして、「人とのつながり」と「自然とのつながり」をずっと大切にしてきた溝延小学校だからこそ、それが実現できると思っています。

